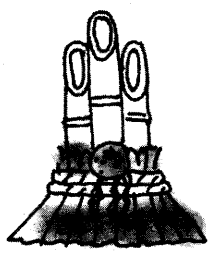


特集

子どもと新年

昆布巻きの話

立川多恵子



子どもと新年という特集を組みたいというお話を聞いて、「おもしろそう、考えてみてもいいですよ」と答え、パソコンに向かいました。ところが、「子どもにとって新年とは……」といった根本的な問題にぶつかって仕事が進みません。近所の子に「Aちゃん、『新年』って知っている？」と愚問を発してしまいました。A子は首を横に振るばかりで

す。そこで今度はA子のお姉さんのB子に向かって、同じような質問をしてみました。B子はすぐ「新年って、新しい年のことでしょう。お正月のことよ。うちではデパートでおせち料理を買ってきて食べるの」と、話してくれました。同じような質問を親戚のS夫（小学生）にもしてみました。S夫は「新年、知ってるよ、お正月のこ

とだろ。ほくの家では昆布巻き作るんだ。ほく、昆布巻き大好き」と言います。

子どもにとって、「新年」という言葉は、そのま
ま、お正月を想起させるようです。B子のお正月は
「デパートのおせち料理を食べる」こと、S夫の場
合は「昆布巻き作り」を思い出しています。

「昆布巻きが、お正月の思い出になっているのはな
ぜだろうか」と、興味をもちました。そういえば、

S夫の母親が年末になると、必ず作り始めるのが昆
布巻きです。年末の忙しい時期のおせち料理作りは
主婦にとって大仕事です。そのため、子どもたちも
動員され昆布巻きを手伝います。S夫にとって、暮
れの昆布巻き作りは楽しいお手伝いなのです。

最近では、父親も参加してお正月の昆布巻き作り
を続けています。そのためか「ゴボウを豚肉で巻き、
それを昆布で巻いて煮る」といった、その家独特の

大きな昆布巻きが出現しました。

除夜の鐘を聴きながら家族で作った昆布巻きは、
父親の運転する「年賀」の車に乗せられて、父親や
母親の実家に運ばれます。

お正月というハレの日をどう迎えるかは、それぞ
れの家庭によって違います。B子の家ではお正月に
なると、デパートのおせち料理を買って食べるとい
うことです。

最近は暮れになると、どの家庭にもおせち料理の
予約ピラが舞い込みます。とかく少人数になってし
まった家庭では、カタログからその家庭に適したお
せちを予約しておけば、年末、店が届けてくれま
す。届けてもらえないにしても、大みそかになって
予約した店まで行けば、彩りよいお重が用意され、
それを年始のテーブルに載せると、元日の祝いの膳
になります。少々費用はかかりますが、それも合理

的かもしれません。

S夫の家でも、かまぼこや伊達巻は専門店から買っているようですが、昆布巻きは、毎年家庭で作ります。

家庭の料理がどんな雰囲気の中で作られているかは、その料理の味まで支配します。したがって、料理が作られるプロセスで味わう充実感もまた料理の貴重な調味料になるといえます。S夫は三人兄弟の末っ子ですが、正月料理、特に昆布巻き作りでは、それなりの役割をもっているようです。

S夫の家の昆布巻きは、その歴史をたどれば、S夫の母親が娘時代に実家で家族と一緒に作っていたものにつながります。母親の実家では曾祖母の時代から、暮れになると、おせち料理を作るのに大わらわでした。

曾祖母の昆布巻きの中味は身欠きニシンでした。



その娘である祖母はハムを芯にして作っていたといえます。おせち料理に昆布巻きが登場するのは、新年を祝う祝い魚を調える意味があります。それと同時に、代々の母親は子どもたちに健康食品である昆布からカルシウムを摂らせて、丈夫な体の子どもを育てたいという願いもありました。

実用と形式を兼ねた昆布巻きは主婦が実家から持ち込んで、家族と育てた家庭文化といえるでしょう。忙しい思いをして、お正月のご馳走を用意なうくて済むような時代になっても、昆布巻きだけは作

り続けているのです。

日本には昔からさまざまな家庭文化が存在しています。それらの多くは親から子どもへ伝えられているものです。一般に、家庭文化は母親が娘時代に親元で家事を手伝うことで学びます。お正月料理もしかりです。

母親が実家で身に付けた家庭文化は、結婚するこゝとで夫方の文化と混じり合つて、子育てを通して子どもたちに伝えられます。

家庭文化には、しきたりや習わしなどいろいろあります。繰り返しも多いわけです。お正月行事も同じです。家族はそうした繰り返しの家庭行事の中で不思議に安定できるのです。しかし、それだけではありません。家庭文化は、父親や子どもたちとの生活の中で変容していきます。したがって、子どもは家庭文化の単なる受容者ではなく変革者でもあるのです。家庭文化は、形を変えながら生活の中で継承

されます。

戦前の日本人は大人も子どもも、「お正月が来たら一つ年を重ねるのだから、しっかりとしなければ」と励まされてきました。しかし戦後は満年齢で数えられるようになり、この論は通用しなくなりました。考えてみると、お正月は過去と未来をつなぐ接点といえるかもしれません。お正月の迎え方、過ごし方によつて、新しい年への期待は違つてきます。

日本人が古来ハレの日として尊重してきた「お正月」が、過去と未来の接点であるとすると、子どもにとつても大切な日です。毎年訪れてくるお正月を家族の集いの場として、伝統を活かした家庭文化創成を楽しんでほしいと思います。家族はそれをバネにして、新たなエネルギーを湧出させます。子どもたちのエネルギーも倍加するにちがひありません。それが未来の活力として生きるのです。

(元十文字学園女子短期大学 幼児教育学科)